

内科医 つれづれ草

高山浩一

⑱

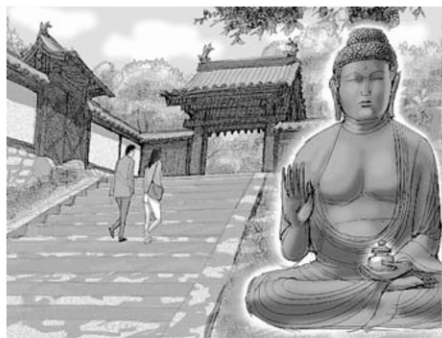
私が現在勤務する京都府立医科大は、創立146年と日本の中でもとても古い歴史を持つ大学のひとつです。青蓮院という古刹の境内に「療病院」を開設したのが本学の始まりと聞いています。

宗教との接点

も何ら不思議ではありません。医療が宗教活動の中に含まれていた時代には、むしろ自然なことだったでしょう。薬の入ったつぼを手に持つ薬師如来も多くのお寺に祭られています。しかし、時代が進むとともに、医療と宗教の接点はだんだんと失われていきました。ただ、がんの患者さんを診ていると、こういうときに宗教家の方なら何と云うだろうかと思わずにいられないことがあります。抗がん剤で治療を始めようとしていた高齢の女性患者さんから「先生、私はどうしてがんになっただけでしょう？」と聞かれ

心を保つヒント探す

たことがあります。その患者さんはたばこを一本も吸ったことがなく、規則正しい生活で、お酒も飲まず食べ物にも気を付け



イラスト：山本重也

て生きてきたと言われます。確かに最もがんとは縁遠い生活習慣だと思えます。私も答えに窮して、どうしてでしょうねと返事をするのが精いっぱいでした。すると、続けて「私のこれまでの行いが悪かったのでしょうか」と、ご自分の人生を否定するようなことを言われます。そんなことはありませんよと言いつつ、自分の言葉が気休めにすぎないことを自覚せざるを得ませんでした。人は自分の身に何か悪いことが起こった時、その理由を探します。理由が見つからなかったら、心のバランスを失って不安な気持ちになるのは容易に想像がつきます。医学で説明がつかなかったら、患者さんが医学の

外にその理由を求めるのは当然かもしれません。このようなときに宗教家の方なら、医学とは異なる視点から、きつとわれわれとは違う言葉で患者さんの心を安らかにできるのではと思ってしまう。仮に私と同じことを言ったとしても、やはり言葉の重みが違うのではないのでしょうか。心の持ちようによって病気は重くも軽くもなります。私は時々、京都の高名な寺院の研修施設の一室をお借りして、患者さん向けにがんの勉強会を開いています。限られた時間であっても、医療と宗教の接点に立つことで、心のバランスを保つヒントを探し続けています。(京都府立医科大教授)